■電気事業及び地域の電気開通状況に関する年表

和暦	西暦	月日	内　　容
大正7年	1918	8月4日	常呂電気株式会社設立（常呂町百年史年表） ＊発電所建築工事は川北電気企業所請負 ＊「常呂町百年史」本文では大正８年１月３１日設立、９月の大洪水で工事遅延、１２月完成、 発電機取り付けが遅れ、施設の引き渡しは９年３月１８日 常呂市街川東（朝日）に常呂電気株式会社創立（常呂町史）
		10月26日	常呂電気株式会社事業許可を受ける（北海道電気事業史）
大正8年	1919	4月3日	常呂電気株式会社成立：社長上杉眞治（北見地区電気事業史）
大正9年	1920	2月3日	常呂電気株式会社開業、出力１５ｋｗ、原動機：横置き単筒吸入ガス機関 位置：常呂村シオヤニ　発電機：15kw・3.3kv・50Hz川北製 原動機：横置単筒吸入ガス機関　工費：25,000円（発電所15,750円 配電線4,400円 屋内2,700円 その他2,150円）（北海道電気事業史） 常呂電気株式会社 資本金２万５千円（１株５０円）　発電方式：火力発電（木炭ガス）２０馬力 社長：上杉眞治　理事：山田久七・稲田勘二　会計：小林千代松　　（常呂町史）
大正11年	1922	6月20日	常呂電気株式会社が経営難で北海道合同電気株式会社に吸収合併される ＊北海道合同電気株式会社の前身は留萌電灯株式会社、大正10年に社名を変更、本社を札幌に移し、 経営を川北企業に移管（北海道電気事業史） ＊「常呂村史」では、「川北企業所」と記述している
大正13年	1924	10月6日	午前６時頃、常呂電気会社発電所火災、午前８時鎮火、損害額見込み１５，０００円〔当直日誌〕 ＊北海道合同電気株式会社常呂発電所のこと
大正14年	1925	5月27日	北海道合同電気株式会社（常呂発電所）火災の復旧使用認可、発電出力が２０ｋｗに増加 （北海道電気事業史）
昭和2年	1927		北海道合同電気株式会社（常呂発電所）火災により電気の供給が止まる〔常呂村史〕 注：大正１３年の火災のことではないか

昭和4年	1929		「小林家文書」に７月５日電気料（６月分）６円３５銭、８月３１日電気料（８ヶ月分）６円３５銭の支出記載　＊８月３１日の（８ヶ月分）は、７月分の記載間違いか
昭和11年	1936	2月	常呂村から合同電器株式会社に対して卯原内からの水力電気系統への接続陳情に対して、合同電気から網走町または野付牛町からの配線延長工事は多額の費用を要し工事着手は困難の回答
昭和12年	1937	3月	(大日本電力株式会社)による網走・常呂間の水力電気配線工事竣功する〔常呂村史〕
		6月30日	網走から卯原内に配電線路が延長されたとき、卯原内で３４ｋｗを３３ｋｗで受電し、ようやく電灯の光も人並みになった（北海道電気事業史） ＊網走からチエトイ沢を経由して電線工事が完成（豊川区開基百年誌） 「昭和６２年度　オホーツク大学感想文集」に昭和１２年に国道沿いに高圧線が引かれ、近くの家では電灯がつき、我が家にも電灯のある生活ができるようになったとの記述あり ＊昭和１２年頃の灯数は６００余灯（常呂町百年史）電灯料金は７百余円（常呂町史） ＊大日本電力より買電・送電を受ける（常呂町百年史） ＊電燈が火力発電より水力発電に代わる〔常呂村史〕
昭和17年	1942		豊川の一部に電気開通。
			共立の一部に電灯がつけられる（共立百年史）
昭和20年	1945	9月	岐阜・土佐・栄浦農村電化促進委員会結成（常呂町史） ＊土佐部落２９戸加入（土佐郷土史） ＊農村電化促進委員会結成後、大島地区にあった旧海軍電波探知機の配線を財務局から払い下げを受け西横浜古河電気会社から資材購入、北見営林署から国有林の払い下げを受け電柱に（土佐郷土史）
昭和21年	1946	4月19日	北海道配電株式会社に対して日吉地区に変電所設置の陳情
		5月4日	北海道配電株式会社から鉄山の発展による電力の大量使用が重要、変電所設備の資材入手は不能で早期の実現は困難、今後の具体的な電力需要計画の策定が必要との回答あり
			富丘の一部に電灯つく（豊川の道道と１４号との交差点から旧浜佐呂間道路沿いに電線架設、送電線付近の住宅に電灯）（富丘百年史）
			川東地区点灯、川西地区１部点灯９戸、１０号付近と道道まで（共立百年史）
昭和22年	1947	8月28日	小島電気の請負で電化工事、土佐・岐阜全地区の１３戸の工事完了・通電。この地区で残された１３戸にも間もなく追加工事（常呂町史）

		7月26日	土佐、岐阜部落通電式：錦水校（当直日誌）
		7月27日	栄浦部落通電式（当直日誌）
		10月	岐阜地区の一部に、電気点灯（岐阜百年記念史） ＊「昭和６３年度オホーツク大学感想文集」に「２２年１０月、藤吉玉一氏の並々ならぬご苦労により岐阜部落に電灯が付き、みんなで喜んだ」との記述あり
昭和23年	1948		北電の電気、岐阜の一部に通電〔常呂町岐阜のあゆみ〕 自家受電組合設立。岐阜地区６割くらい点灯（岐阜百年記念史）
			田中光一から長谷川氏まで通電（共立百年史）
			常呂の無電灯戸数は２８９戸、全戸数の２０%に相当（常呂町百年史）
昭和24年	1949	2月27日	（常呂高校）各教室への電灯設備工事が完成するが、電力事情が悪化。校舎使用困難のため、役場議事堂において授業を行う（常呂高校４０年史）
		12月	常呂市街地無点灯地域を主とする電灯配線工事が行われた（常呂町史）
			岐阜・土佐の電気施設を北海道配電会社に移管。 自電受電組合、北電に移管〔常呂町岐阜のあゆみ〕
昭和25年	1950	12月11日	富丘地区の一部通電（富丘百年史）
昭和27年	1952	12月22日	福山・日吉・吉野・登地区電気導入組合設立、電力供給
昭和28年	1953	6月	福山地区電気導入組合、４地区組合より独立して結成
			常呂変電所が豊川に建設される。
			岐阜地区に電気灯る〔常呂町岐阜のあゆみ〕
昭和29年	1954	6月27日	福山地区電通祝賀式：福山小学校（当直日誌）
		6月24日	共立製パン工場電通及び開所式（当直日誌）
		6月27日	針田鉱業所を含む日吉の一部と福山地区に送電開始。
		6月27日	福山地区電通祝賀式：福山小学校（当直日誌）
		6月	（福山小）電気開通、青年団運動場整備（福山小休校記念誌） 山かげの部落であるが、今年６月に電気が入り、文化の導入も容易になった（常呂町青年団大会記録）
		7月7日	日吉・登・吉野地区通電〔当直日誌〕 ＊「平成６年度オホーツク大学文集」に、「各家庭に電気が導入され時は、吉野部落をあげて喜びに

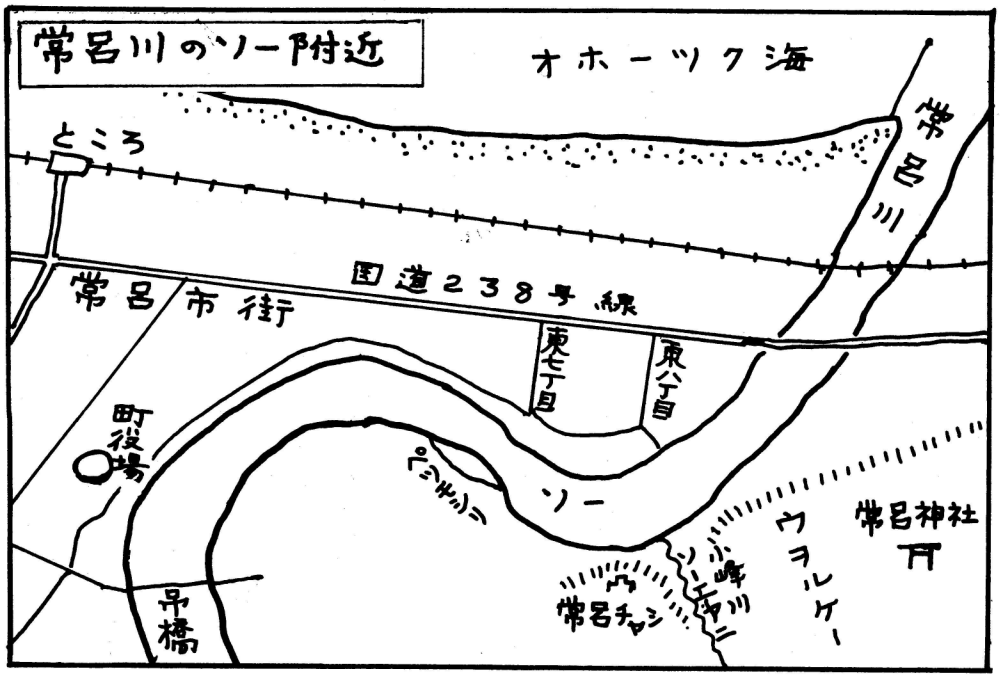
			沸いた…ラジオからテレビに変わり、ニュースやドラマを毎日見ることができるようになり、毎日を楽しく暮らせる幸せを喜び合った」の記述あり ＊「日吉小学校開校８０周年記念誌」に、「送電された時の感激はどこも同じ…電気製品を購入して生活に潤いが出て、目の前が希望に満ちあふれてくるような気持ち」との古老の記述あり
		7月21日	日吉電通式・祝賀会（当直日誌）
		12月5日	自家発電組合設立、岐阜・富丘・東浜地区に送電される 岐阜・富丘・東浜電通祝賀会：於岐阜（当直日誌） ＊更生、湖畔、地区に自家受電組合設立、通電（岐阜百年記念史）
			＊富丘地区電気利用組合設立、残り全戸に電気が引かれた（富丘百年史）
昭和30年	1955		東浜地区に通電（常呂町百年史）
昭和32年	1957	11月末	日吉・福山小学校電気工事（広報ところ）
昭和34年	1959	3月	常呂の無電灯戸数は６０戸で３%に減少、３７年３月には２０戸で１．１%に（常呂町百年史）
昭和35年	1960	6月15日	常呂市街電灯新設点灯式：駅前〔当直日誌〕
昭和43年	1974	4月	日吉地区電気利用組合、北海道電力株式会社に移管〔農協３０年のあゆみ〕

▶**「電気事業及び地域の電気開通状況に関する年表」を補強するためのデータ**

＊常呂電気株式会社の位置・吸入ガス発電機に関する資料

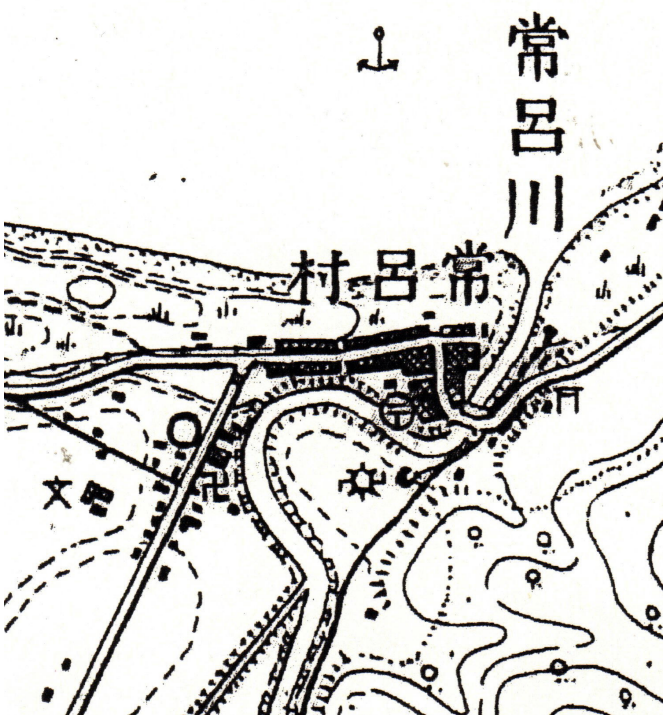
＊各地域の電気導入・開通に関する資料

※常呂電気株式会社の位置　『北海道電気事業史』記載の「シオヤニ」の位置



「常呂町百年史　常呂町アイヌ語地名の記録」から転載

「シオヤニ」は、旧字名「シヨヤニ」で、「ソーエヤニ」または「ソエヤニ」とも表記される。ソーの下手のところにそそぐ東岸の支流、常呂神社のすぐ上流側の沢の名を指す。



大正１３年測量、大正１４年発行の「仮製版五万分一地形図網走十六号」に発電所が記されています。

『常呂町史』記載の旧朝日地区です。

発電所のマーク

※常呂電気株式会社導入の「吸入ガス発電所」

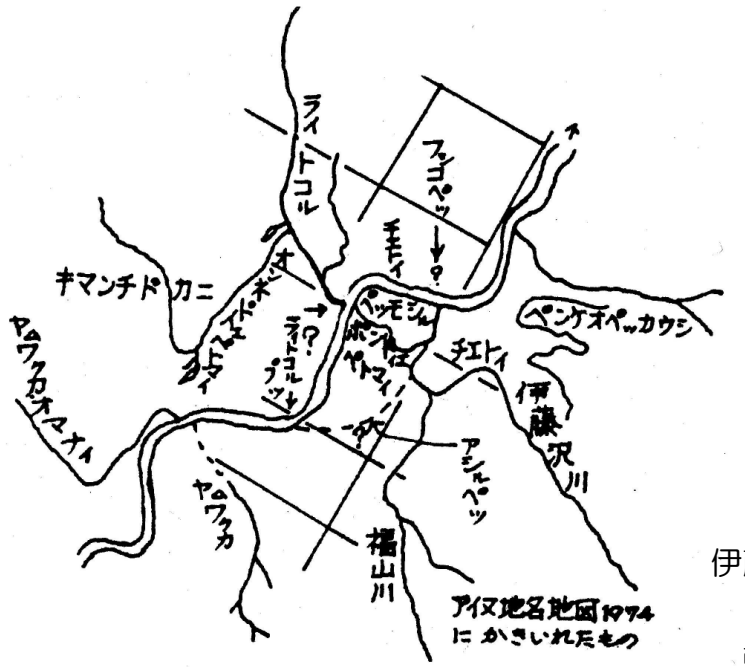
吸入ガス発電所は、設備が簡単で発電所の建設委が安かった。また、単純な設備で取り扱いも容易である。その上、燃料が木炭であるから森林で覆われていた本道には向いていた。さらに、発電所は排気音はあったが案外需要の中心近くに設けられて配電費を減らすことができた。人口密度が少なくて部落間隔の遠い本道では部落ごとに発電所を設けることを余儀なくされたので、こんなところはガス発電所の独壇場であった。

北海道で開業した電気事業者は８９にも及び、そのうち、吸入ガス発電所を電源にした事業者数は３１の多くに達している。しかも、その発電所の平均出力は３２ｋｗと小さいものである。（北海道電気事業史）

■豊川地区「豊川区開基百年記念誌　ふるさと」から抜粋

昭和１２年には網走からチェトイ沢を経由し電線工事（註：水力電気の送電線）が完成、大日本電力より買電送電を受ける事となった。

豊川の堤内に電線の入った場所は１６号の堤防付近であり、１５号あたりから現在の道々北見常呂線沿を通り、常呂市街に至った。豊川では昭和１２年当時、電灯料が高いため、これまでどおり石油ランプを使用する家庭も多く、利用戸数は電線沿いのごく一部の家に限られ、豊川においてほぼ全戸に電気の普及をみたのは終戦直後のことであった。

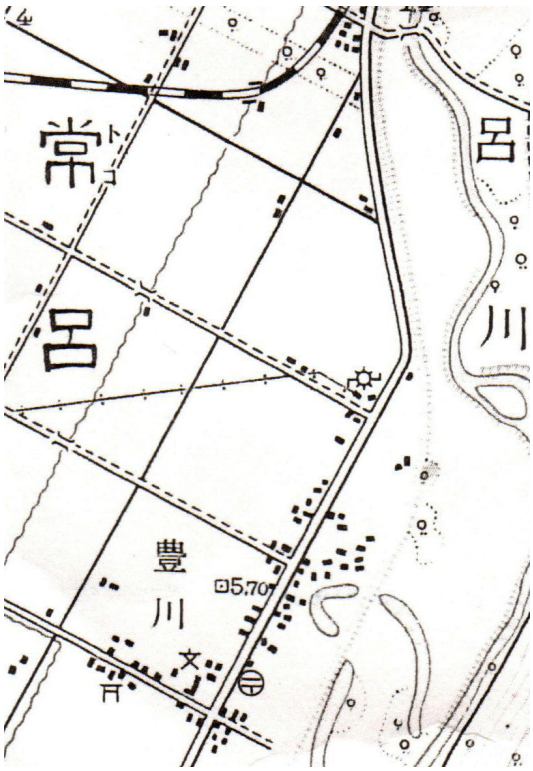


註：「チェトイ」は、福山の伊藤の沢と呼ばれる地域で、太幌橋から南へ少し下った ところにある「１号橋」を流れる伊藤の沢川の源流にあたる。

註：チエトイは、卯原内からの直線距離が短く、低くなだらかな傾斜の沢になっているため、この地を経由したものと思われます。

伊藤せいち

「常呂町のアイヌ語地名」から転載



昭和２８年には、北海道電力株式会社常呂変電所が、常呂地区の電力量の増大に対応するため、岡崎勇氏の土地の一部（現在の泉虎雄宅の道々をはさんだ向い側）を買い上げ提供を受け運転を開始した。
（註：道道北見常呂線と町道１２号線が
交わる常呂側）

供給範囲は、東は卯原内、西は若佐方面、南は日吉地区、北は常呂市街地を供給圏としていた。当時は、電圧２０，２００ボルト、設備容量２，１００キロワットであったが、昭和４９年には、電圧２２，０００ボルト、設備容量は３，０００キロワットに拡大された。

左：昭和３２年１１月発行
五万分一図網走十六号（常呂）から転載

■富丘地区「富丘百年史　拓頌」

富丘に初めて電灯がついたのは、昭和２１年豊川の道々と１４号との交差点から、旧佐呂間道路沿いに浜佐呂間に向かって送電線が敷かれることになり、工事が始まった豊川側から送電線付近の家に電気が引かれた。

送電線の電柱に変圧器を上げ、変圧器から電柱５木までの距離の家５戸に電気が引かれて、電灯は「ろうそく送電」と呼ばれ、１戸に１灯のみであった。電球は１０ｗで部屋の中がすべて見え、ランプよりも明るくて眩しく輝いていた。

この工事を請け負ったのは、浜佐呂間の真光寺住職であり、受益者は電柱を立てるのを協力した。また、工事をしたのは鈴木礼典氏で、当時の変圧器はよくコイルが焼き付き、そのたびに北見まで変圧器を馬車に積んでコイルの巻き直しに出かけた。

その後、昭和２５年に富丘の一部に、また２９年に設立された自家自電組合によって残り全戸に電気が引かれた。電柱を立てたのはすべて受益者の無償奉仕であった。その後北電に移管され組合は解散した。

■富丘・東浜地区「常呂町百年史」から

富丘では昭和２５年に一部で通電がなされるが、多くは無電灯地区であった。それゆえ、２９年に電気利用組合を作り、自家発電で電気の供給を行うようになる。しかし、３０年には、岐阜の未通電地域、東浜などとともに送電が行われる。

註：昭和２９年１２月５日　岐阜・富丘・東浜電通祝賀会：於岐阜（当直日誌）

■土佐・栄浦地区「土佐郷土史」

終戦直後の昭和２０年９月、急速に電気導入の熱望が再燃し、土佐、岐阜、栄浦農村電化促進委員会が結成され、岐阜：藤吉玉一を会長に、土佐：内藤清之助、栄浦：生田精次の両人を副会長に選び、加入者１戸平均１万円を目標負担額と定めて発足した。

早速大島地区にあった旧海軍電波探知機の配線を財務局から払下げを受けたものの、不足資材の入手には腐心し、ようやく西横浜古川電気会社から必要資材のすべてを買い求めることができた。

電柱については、北見営林署から国有林の払下げを受けて、各戸から出没して翌２１年春までに所要数量の伐出を終え、融雪と共に馬車又は自動車で運搬した。

昭和２２年、小島電気の請負で工事に着工した。部落の人々は工事手伝いのため出役して外線、内線工事が始められた。

当時、土佐部落では２９戸が加入した。別に小原友徳、猪野間茂は道々に近く、北海道配電会社の配電線が卯原内から福山、豊川を経て道々沿に常呂市街まで送電されていたため、これを利用して同年９月２０日一足先に電化を実現した。

工事は部落の手伝いもあって急速に進捗し、翌２２年８月２８日、土佐、岐阜全地区が完了と同時に点灯された。この地区で残されていた１３戸にも間もなく追加工事が行われたが、栄浦地区は各戸の負担額で一時中止の状態となった。

註：昭和２２年７月２６日　土佐・岐阜部落通電式：於錦水校（当直日誌）
７月２７日　栄浦部落通電式（当直日誌）

当時は戦後間もない時代のこととして、資材の確保、工事の認可等には困難を極め折衝にあたった役員は出札、上京の連続で運動を重ねた。

時の北海道電力部長柴田は常呂出身であったため、現地の事情と地域の熱望を理解してその指導援助によって遂に実現を見るに至った。

食糧事情の最悪な時代で出札、上京の時は食糧持参での旅行であり、車中で食べるつもりであった小麦粉の団子が宇都宮附近で腐敗し仕末に困る一方、食べるものがなく空腹をかかえて途方にくれたことも苦労話しの一つであった。

昭和２４年１２月、土佐・岐阜部落の電気施設の一切が５８余万円で北海道配電会社に買収された。

■岐阜地区「岐阜区開基百年記念誌　闘墾」から

昭和12（1937）年に大日本電力株式会社が網走・常呂間に送電線を施設、この電気を市街地、川沿から岐阜・下佐呂開聞を含め、1､000灯を目標に売ることとした。しかしその後戦時体制となり、電力会社の統合などで送電施設ができぬまま終戦を迎えた。

昭和20（1945）年９月、公職追放で村長の職を去った高清水慶吉が農業会に入り、農村電化に取り組んだ。そのきっかけとなったのは、戦時中大島地区に駐屯していた軍隊が残していった電波探知機の配線だった。

岐阜・土佐・栄浦農村電化促進委員会が結成され、岐阜の藤吉玉一が会長になり、加入者１戸平均１万円を目標にを負担額を定め、さっそく財務局から配線の払い下げを受けた。

また電柱材も国有林材の払い下げを受けることができたが、その他の資材が足りず、藤吉玉一・高清水慶吉ら役員は、食糧持参で11回にわたって上京、漸く西横浜の古川電機から必要資材を求めることができ、昭和22（1947）年から地区住民の労力奉仕で工事に入り、8月28日、岐阜・土佐の13戸の工事が完成して通電、さらに残る家にも間もなく通電した。

■共立地区「共立百年史」から

共立地区に電気が導入され始めたのは昭和１７年頃からである。岡崎務、高橋一夫、後藤広徳さんから始まり羽石元一、安藤博一、中股巌、木屋義嗣、川西喜太郎、田中光一さんたちが昭和２０年頃であり、終戦をはさんで羽石茂、後勝義満、森脇勘一さんたちに昭和２３年１１月頃電気が導入されて行き、その後共立全戸に電気が導入されて行った。

その当時の電気設置料は、１戸負担約１万円程度で、電柱、電線等の資材もあまりなかった。電柱を譲り受け、工事代金をおさえた。その当時の農業収入は１戸平均３千円ぐらいであったから大変であった。

電気が導入されてからは、生活の中にラジオ等も入り一段とにぎやかになったが、その反面電力不足で毎週何回かはローソク送電が行われた。（ローソク送電とは、電球の中のタングステン線が赤くなるだけで灯火の用はなさない状態でであったが、電気がついたと喜んでいた。）

工事中は毎夜自家澱粉製のドブロクを工事従事者にごちそうし、家族みんなで楽しんだ。開通式は農協より長船栄一参事と北電常呂事業所ハ鍬所長と職員１名と工事請負人、石橋湊、受益者全員で後藤義満宅で祝った。

■福山地区「イワケシュ郷土史」から

福山地区に電気が導入されたのは、昭和２９年のことである。それまで、開拓以来数十年間は無灯火地帯であり、開拓当時のカンテラ生活から吊り下げ石油ランプ生活が永く続いた。やがて昭和に入ってからアセチレンガス灯や蓄電池による灯明と移り変わっていった。

終戦後になって電力事情がやや緩和されてきた。昭和２６年になって部落においても電気導入の声が盛んとなり、福山以南の４部落が電気導入組合を組織し自家受電方式による導入を計画するに至った。組合長、真野　司馬外役員一同が総力をあげて、北海道電力北見支店へ要請を続けたが、その実現への道はなかなかきびしいものがあった。

註：電気導入組合の組織：「常呂町百年史」では昭和２７年

このような情勢の中で、２８年6月、福山地区単独で導入をはかることになり先に加入した受電話組合から脱退し、新たに福山地区電気導入組合を組織し、北電へ再三再四にわたる要諸運動の結果、ついに希望を会社側で取り入れることになったのである。同年の秋になって計画実測の結果、一般農電負担金工事として導入が決定した。

工事は、翌２９年5月上旬に着工開始となる。受益者としては、完成の一日も早からんことを念願して農耕期の多忙な中にもかかわらず、建柱工事、その他工事促進のため１

戸数人宛の労務出役により短期間に完成をみることができた。
　針田鉱業所を含む日吉の一部をあわせて、同年の６月２７日に永年待望の電灯が部落各戸に明るく輝いたのである。この瞬間、暗夜に光を得たように家族一同は小踊りせんばかりに喜び合った。この電気導入によって、生活面の向上はもちろんのこと、部落産業発展に大きな貢献が今後に期待されたのである。
　註：昭和２９年6月２７日　福山地区電通祝賀会：於福山小学校（当直日誌）
　なお、工事負担金の総額５，５２８万円のうち、針田鉱業所が２５０万円を負担し、残金の５，２７０万円のうち８割を電気導入資金でまかなった。１戸あたり平均負担額は内線工事を除き７万円余りであった。
　福山共進地区は、卯原内と常呂間の高圧送電線が架設され、すでに昭和１１年から電灯に恵まれた生活をしていた。

■日吉・登・吉野地区
「常呂町百年史」から
　福山とは別に、日吉・登・吉野の３地区は昭和２７年に結成した電気導入組合により、２９年７月７日に通電がなされた。
　註：昭和２９年７月２１日　日吉電通祝賀会（当直日誌）

奥泉勝雄「平成元年度オホーツク大学文集　日吉鉄山の歩み」から
　昭和２９年に春早々、電柱が来ていた共立駅から測量をして、鉄山の自動車を頼み、電柱を配置した。次は建柱のために穴掘りの人を頼み、穴掘りが終わればすぐ建柱を始めた。その際、北電から条件がつけられました。それは電柱敷地と測量の時の人夫賃、建柱する時の人夫賃は受益者負担ということになり、仕方なく北電の言うままで漸くにして入電の運びも決着しました。後は配線及び外線、内線工事は電工さん方の仕事で、電工さんが何人も来て行いました。導入については大変苦労しましたが、入電完成しばらくして電気導入利用組合の落成式を行い、役員の方々には感謝状が贈られています。

■吉野地区「吉野５０年の歩み」から
　（昭和２４年）南部地区が農村電化の方針により、北海道電力がここに電気の敷設をなし、ランプ生活から明るい生活に変わることになった。しかし、東部西部地区はこの中に入らず、明るさから取り除かれており、再々敷設について願い出るもなかなか容易ではなかったが、昭和２７年、日吉地区、登地区、並びに吉野地区一同によって電気利用組合を組織し、農電を入れることになった。しかし、すべての資材は受益者負担であったので、当時の関係者の苦労は並々ならぬものがあったが、初めての電気が敷設され、明るい生活ができるようになった。これがきっかけとなり、すべて電力を利用する方向に向かい、さらに各戸にラジオも取り付けられ、明るさの上に楽しさも増加され、生活にも文化のうるおいを得るようになってきた。